軍靴の音よ さらば

清水鶴子

清水鶴子

軍靴の音よさらば

ある戦争未亡人の一生

未来社

軍靴の音よ さらば
——ある戦争未亡人の一生

一九八二年三月一〇日 第一刷発行
一九八二年四月 五日 第二刷発行

定価 一三〇〇円

©著者 清水鶴子
発行者 西谷能雄
発行所 株式会社 未来社
東京都文京区小石川三—七—二
電話〇三—八一四—五五二一番
振替（東京）七—八七三八五番

本文印刷＝第一印刷
装本印刷＝形成社
（装幀＝入野正男）
製本＝今泉誠文社

乱丁・落丁本はおとりかえします。

まえがき

あの悲惨をきわめた第二次世界大戦が終ってから、はや三十七年の歳月が流れました。

そして、戦争を身をもって体験し、その実情をつぶさに知った人々は、みな年を取り、その数もだんだんと少くなって、戦争の恐ろしさ、空しさ、悲しさ、愚かしさを全く知らない人々の方が過半数を占めるようになりました。

現在の日本は、民主主義国家となり、経済的には世界第二位を誇る国となりました。そして現在の若い人々は平和に楽しく自由を享受して暮しております。

しかし、三十七年前の日本はどうだったでしょうか。ファッショ的な軍国主義体制の下で、言論の自由は全く閉ざされ、正しい情報から眼かくしをされて、超大国の米・ソなどを相手に遮二無二戦わされていたのです。若い男性はほとんど戦場に駆りだされ、残された老人、女子どもは、飢餓線上をオロオロし、敵機の空襲に逃げまどい、あるいは焼け死に、主な都市は焼

野原と化したのです。

戦場に駆り立てられた将兵達は、世界の各地で、異国の土と消えたのです。内地で戦禍にあい横死した国民を合わせると、実に三百万人以上の尊い生命が奪われたのです。

現在もなお、南の海の底に船もろともに沈んだ兵士達、そして南方各地のジャングルの中で砲弾や飢えやマラリヤで死んでいった兵士達の遺骨の多くは、うち捨てられたまま風化しています。それらの事を考えると、夜中でも眼が覚めて、悲しみの涙が流れます。自分だけが生き残って、温かい蒲団の中で寝ているのかと思うと、戦死した方々に申訳なくて、涙はとめどなく頬を濡らします。

少女時代の私は、何とか人並みの苦労知らずの娘として育ちましたが、父の死によってわが家は急激に没落の過程を辿り、私の苦難の人生がはじまりました。学者肌の貧しく若い官吏だった夫と知り合い結婚して、貧しさの中にも楽しい新婚生活を送ったのも束の間、翌年には日中戦争がはじまり、夫のもとに召集令状が来たのです。それからは、夫も私も戦争の渦中に捲き込まれ、私の波瀾万丈の悲しい人生が繰りひろげられていったのです。

夫は高田聯隊に六カ月教育訓練を受けた後、ソ満国境のハイラルの守備隊付きとなって出征しました。その後、夫は再度の赤紙で、フィリピンへ送られ、遂に帰らぬ人となりました。その間、幼い愛児も零下四十度のソ満国境の丘で、ひとすじの煙となって、この世から去ってゆ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

きました。

また私の愛する弟も、学校を出ると間もなく赤紙がきて、宮古島で、敗戦直後、マラリヤと飢えのために二十五歳の若い命を閉じました。

愛する夫、愛児、弟をみな戦争のために失った私が、たった一人残された幼い四歳の長女を抱えて、貧しさと病弱と闘いながら、今日まで生き抜いて来られたのは、不思議なくらいです。生活の苦しさ、世間の冷たさのために、「いっそのこと、死んでしまいたい」と何度思ったことでしょう。しかし夫が最後に出征する時、「この娘を頼む」と言い残していった遺言が耳の奥に残っていて、どうしても死ぬことも出来ませんでした。世間の冷たい侮蔑の中にも、温い人情もありました。亡夫の親友方が輸血のお金をカンパして下さったお蔭で、私は九死に一生を得て、病気から立ち直ることも出来たのです。

こうした苦しみ、悲しみを堪え抜いて生きてきたのは、私だけではありません。

息子を失った老母、頼りにする夫をなくした妻はみな、涙をこらえて茨の道を歩んできたのです。

戦争によるこの悲しく苦しい体験を語り継ぐべき人々はみな年老いて、どんどん死んでゆきます。この戦争によって、いかに多勢の女達が、涙の一生を送らねばならなかったかを現在の若い人達はほとんど知ってはおりません。

昭和五十三年は、私の夫の三十三回忌でした。いつも貧しく生活に追われて、亡夫の墓すら建ててあげることも出来ませんでした。やっと僅かな貯金も出来たので、どんなささやかなお墓でもよいから建ててあげたいと思って、東京都の霊園課へ、「墓地の分譲」のことを問い合わせましたところ、「戦死して、遺骨の全く無い者には、埋葬許可も下りないし、従って墓地の分譲は出来ない規則になっております」という冷たい回答が戻ってきました。

私は仕方なく亡夫のお墓を建てることを断念しました。そして亡夫や愛児の想い出を綴った小さなパンフレット程度の小冊子を作り、鎮魂歌として供養することに致しました。

二百部ほど印刷して、亡夫の友人、私の友人、知人、親類等に寄贈して、菩提をとむらいました。この小冊子を読んで下さった某大学の先生は「とても良い記録だ。戦争の実態を全く知らない現在の学生達にも読ませてやりたいので、余部があったら、もう三、四冊送って下さい。大学の図書館に入れて置きたいから」と言って下さいました。そして、「もう少し詳しく書き直して、チャンとした本にしたらどうですか」とも言って下さる方もいました。

私はそれらのお言葉に力を得て、原稿用紙三百枚余に書き直して、何とかして出版したいものと考えました。夫のお墓を建てるより、一冊の本によって戦争を知らない若い方々に少しでも戦争の悲惨さ、空しさを知ってもらい、反戦のための運動をしていただいて、人類の平和のために尽力していただいた方が有意義だと考えたからであります。

近頃、軍備が拡張され、戦前の徴兵制度復活の声がささやかれたりして、薄気味悪い予感が致します。

戦地に出発する兵士達の重たく悲しい軍靴の音、銃剣の音を二度と再び聞きたくありません。夫や息子を戦地に送り出す、妻や母親の悲しいバンザイの声も再び聞きたくないのです。男達が戦場に赴いて死ねば、その蔭で泣くのは、母親、妻、姉妹達です。

人口の半分を占める女性が手を結び合って「戦争反対」を叫べば、戦争は回避できる筈です。日本の女性だけでなく、世界の女性がみな心を合わせて戦争反対に立ち上れば、必らず、あの愚かな殺し合いの戦争を抑止できることと思います。

私は若い方々のように、街頭に立って、プラカードを持って行進することも出来ません。せめて拙い文章か、歌などで、反戦思想を訴えることぐらいしか出来ませんが、若い方々にお願いします、自分の息子を戦場に送りたくなかったら、また、夫を異国の土と化したくなかったら、戦争に反対する運動を押し進めて下さい。私が、なめてきたような苦しく悲しい生涯を誰にも体験させたくありません。戦争未亡人と戦争孤児とを再び作ってはなりません。

戦争のため、何もかも失い、人生の幸福から見放された一人の女の寂しい生涯でした。

私は既に年を取りました。長い間の苦労で体も弱っています。

一人の娘も他家に嫁ぎ、いまは私は独りで静かにアパートで暮しております。

三十七年前にフィリピンへ発って征った夫の寂しい軍服の後姿が、今でも眼先にちらつきます。ハイラルで急死した可愛い坊やの笑顔が眼底に焼きついて離れません。

「お父さんも、お母さんも後から行くから、天国で待っていておくれ」と坊やと約束したのを守るかの如く、夫も天国へ旅立ったのに、私だけがまだこの俗世に生き残っております。が、やがて天国で三人が出会える日まで、平和を祈念して生きるほかありません。

私のこの拙い本を読んで少しでも戦争を憎む気持を若い方々が持って下されば本望です。

清水　鶴子

軍靴の音よ さらば

——ある戦争未亡人の一生

目次

まえがき……一
少女時代……一三
父の死と没落……二〇
結　婚……二一
出征・長男誕生……五四
渡満・ハイラルでの生活……七二
長男の死……九〇
病気・応召解除……一〇一
長女誕生・夫の外地勤務……一一

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

再度の出征・空襲……一三六
疎開・敗戦……一四一
夫の戦死・慰霊祭……一五六
就職・苦難の途……一七四
新しい職場・病気入院……二〇一
移転・再入院……二二三
娘の結婚・定年退職……二三一
あとがき……二三七

軍靴の音よ　さらば

——ある戦争未亡人の一生

少女時代

私は明治四十四年も終ろうとする十二月の半ばすぎに、丸山誠之助の次女として、牛込加賀町で生まれた。

父親の誠之助はセメント会社に勤める会社員で、四十六歳、母親のハルは三十一歳であった。私の上には、暁星中学校の付属小学校に通っている二人の兄と四歳になる姉とがいた。

大正二年に、父の誠之助は、渋谷の南平台に、二百坪の土地を買って、かねて念願の純日本式の家を新築した。

その頃は豊多摩郡中渋谷字南平台と呼ばれていた。まだ四辺には林も畑も野原もあり、閑静そのものであった。近所には西郷隆盛の子孫の住んでいる大きな邸もあって、その辺一帯の山林を西郷山と呼んでいた。山の下にはきれいな小川も流れていて、ところどころには清水も湧き出していた。山には美しいすみれの花が咲き、茶畑には摘みきれないほど沢山の土筆が顔を

出していた。すこし足をのばすと目黒田圃が広々とひろがっていて、赤いれんげ草が咲き乱れていた。

そうした美しい静かな自然の中で、私は幼年期、小学校時代を過した。

私は生まれて間もなくの頃、ひどい百日咳にかかり、瀕死直前で危い命を助かったそうである。それ以来、ずっと虚弱体質となり小学校時代にはよく病気をした。中耳炎を手術して入院したり、貧血で顔がすき通るほど蒼白になったりした。

慶応病院の小児科部長の唐沢博士の診察を受け、ヨードヘラトーゼとかキナ鉄葡萄酒とかのまずい薬をさんざん飲まされた。その時博士は「このお嬢さんは二十歳まで生きられないかも知れませんね」と言われたそうである。

毎日、通学はしていたが、私が余り痩せて青白い顔をしていたので「肺病・青瓢箪」と男の子達からいじめられたりもした。

動悸がひどいため、学校の運動会や遠足はいつも欠席して、家で本ばかり読んでいた。

妹達と外で遊ぶこともせず、学校の勉強をしたり、グリムやアンデルセンの童話などを繰り返し読んでいた。

時々、遊びにきた叔母がよく言っていた。

「いつ来ても鶴ちゃんは青い顔をして、火鉢の番ばかりしているのね。もっと外へ出て、鬼ご

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com